

第四節 朝鮮出兵

文祿の役と黒田長政の活躍

天正十九年（一五九二）、黒田長政は秀吉に命ぜられて、朝鮮渡海のため中津川で兵船を準備し、船頭・舵取・水手などを徴して、翌文祿元年（一五九三）三月朔日より、肥前名護屋へ集結した。長政は軍役として五〇〇〇人の動員を割り当てられた。

黒田孝高は三年前に隠居していたが、名護屋にとどまり、軍の評定に加えられた。

黒田長政軍は、金海口に上陸し、小西行長軍の跡を追い、わずか一四日で京城に入った。途中、小西軍が攻めなかつた沿道の城砦を攻略しながら進軍した。

小西行長が平壤まで進撃したため、黒田軍や大友軍は一日の行程つなごとに繋ぎの城砦を構え、補給連絡路の維持に当たった。

大友氏改易される

ところが、文祿二年正月六日、明国

より李如松率いる五万の援兵を中心

とする二〇万が平壤を包囲したため、小西軍は、兵三分の

二を失う苦戦をして、京城へ撤退した。途中、小西軍が到

着する前に、大友吉統軍が鳳山の城を捨てて撤退したため、



大友義統の花押

小西軍は追撃されて、ようやく京城にたどりつき、これを秀吉に報告したので、秀吉は激怒し、大友吉統の行動は、戦の常道を知らない、かつてきいたこともない卑怯な振る舞いであると、全武将へ書き送り、豊後一国の知行を没収して、秀吉の蔵入地（直轄領）とし、吉統の身柄を毛利輝元に預け、のち常陸に移した。こうして鎌倉時代から続いた豊後の名族大友氏は断絶した。

大友吉統も、仙石秀久・佐々成政らと同様、一国の知行を没収されて秀吉の吏僚たちへの見懲しめとされたのである。

黒田長政の家臣小河伝右衛門は龍泉の砦をよく守り、小西軍を無事撤退させた功として、妙見岳・龍王山付属地一万石の秀吉直轄地を与えられたが、伝右衛門は病をえて帰国途中、対馬で歿した。

黒田軍も京城に撤退して、数年間攻防を続けたあと講和が調い、文禄三年（一五九四）に長政軍は帰国した。

慶長の役

慶長元年（一五九六）、和議が破れ、翌年、西国の諸将は出兵を命ぜられ、黒田長政は五三〇〇余の軍役を割り当てられ、渡海した。今度の日本軍一三万余は、朝鮮側の強い抵抗に遭い、日本に近い海辺に城を構え籠城して日を送った。慶長三年八月十八日、秀吉が死去し、順次、兵を撤回した。